







特  
4424  
11

陽太  
2月23日  
29日  
3月21日  
行  
稿原

つりよかけ

白

泛<sup>ニ号</sup>べる儘<sup>一</sup>に

◇自己中心明治文壇史<sup>2.0</sup>の<sup>5.0</sup>面

江見水蔭<sup>1.2</sup>

文士保護問題<sup>2.0</sup>

明治三十三年の夏<sup>5.0</sup>の上<sup>6</sup>

東洋多事で、北清の戦雲が擴大してゐる一方、文士保護の聲が大分高鳴るのがある

六子コダ



# 同

## 乙

網子心(中略)  
 ▲茲に我輩は、文士保護会の内、智識を廣くしめんとする点の立案に新計畫を発表せり。  
 ▲我輩は、上田氏の夜會招待説を以て廣く文士を如何する場所を臨み得る特權を得せしむるに有るべし。  
 ▲上田氏は云ふ。  
 小説家の側より見ると、徳考亦甚靡し、て振はざる觀あり所謂小説界の一

日本洋報 第二十七號(七月一日)より、自らは江水生の名で左の如く論じた。  
 ▲久しいが故に、又火の争が揚つた様だ。其内で一寸注意すべきは、上田(敏)氏の夜會招待と看板の優遇説と、齋藤(緑雨)氏の競争製作を楯に取つた保護論とで、齋藤氏のは出来得る限りは、皇太后陛下の名の下に、其競争製作を行うこと、金牌と銀牌とを賜はる様と云つた

A 10 20 書山 二河 宛 宛 宛



月  
了

いりて、現る川上眉山氏が田園を治す就  
て語つるの大阪毎日に出てる、其大  
意は、  
今の処では多方向に向つて交際をす  
ることを極力諱るは善なりとせん廣く  
観察仕せよと思つても残念な事が出  
来ないのです、ですから皆んで得る  
ものは何ぞやと云ふので内かくと東  
京に居りてやうな事より田舎へ引  
込んで静養する方が善いかなと

大 綱

No. \_\_\_\_\_

6  
社会を作りて其範圍外に出でず試み  
は徳善の交際が那辺に及ぶるを以て  
小教養界の正実業界の正徳善或は社  
會の一端の接觸にせざるべし爾れ  
内部は適るべりと云ふ能はざるにあ  
らざるや  
(中略)  
▲小説界の範圍外に出るのを好む人は  
少り、出んとせざる能はざる人の多

~~小説界の範圍外に出るのを好む人は少り、出んとせざる能はざる人の多~~

八二〇 巻二 小説界の範圍外に出るのを好む人は少り、出んとせざる能はざる人の多

No. \_\_\_\_\_



# 6 月

知識を廣くするの爲の保護計畫  
 として、文士として如何なる場所より出入し  
 得る、特權を授けよ。天長節の夜會、所定の茶花  
 へ出るあり。  
 ▲範圍外を出でざるはあらず、出で得る  
 何んぞの無いと信ぜらる(下巻)  
 餘裕があれば那の他の物を書くのは  
 是等くは當らぬいれども、程餘裕  
 の他、作し出すせの事をいふと別  
 に出るものも其位大膽をやりて那  
 の他、作し出すの事をいふと別

細

大

16 と思ひます

▲何んと悲しい文士の身の上！  
 居る候で  
 居る。尾崎紅葉氏も亦斯う云つて居

ゴラが馬車の事を書く事、巴里の馬  
 車を悉く見てあるといれと云つて名工  
 苦心の所が見えるふど云つた者も其  
 つれが、那樣事は當然の事ぞ我々の方  
 が確かに其以上の苦心を嘗て居  
 るゾラはそれだけの餘裕があるの

A 1121 青山 二河原屋三郎

No.



# 白

△△△△  
 特立獨行のもので、荷々の拘束を受くことは  
 拒す<sup>と</sup>氣を吐く。夜會招待説の如きは文士自  
 己の口はよすべきではないといふべき有つた。  
 紅葉は又同案を引用せしと説き、衣食定つて  
 後始めて禮節を知る。生活の餘裕が出来る始  
 めに充分の創作が出来るので、その保護は政  
 府が要求するが<sup>その</sup>近道といひ。日本の上流社會  
 がモット文學趣味を解し、文士を尊敬し、文  
 學を保護するに努め、下層社會が影響して、文  
 國有文の民と成るべきであるといふのである。

斥敵、南洋航海の軍艦の便乗、征軍、文士<sup>の</sup>  
 門戸を解放せよと説破して、之は  
 之ふ可くも行けぬと論では有るまいと結  
 んである。  
 同問題に就て、石平洋、引つゞき、露  
 伴、紅葉、緑雨、魯庵、柳作、小波、<sup>道達、松濤、</sup>  
 の意見が、西村醉夢の筆記して、順次発表し  
 た。  
 それを一々誌に発表してゐる。

露伴の意見は、~~紅葉~~ 文士保護論は不可  
 行の事であると唱破し、~~紅葉~~ 文士は



# 白

録兩日最社の説と同しく、魯齋は不必要論  
 者で、穿つ悲しい哀れな声かといふ。教十年  
 の後の日物質文明の進歩と共に、らん心問  
 題は自然消滅すると豫言められた。

柳浪は自己としては不必要だが、録兩露  
 伴の二説には賛意を表現し、**白**は自己修  
 養を説き、不必要論を主張。

逍遙は、保潔の興へたやうして大文豪は出  
 ない。文學が文學であるといふのは、**文士**が文  
 學のみを從事して生活は出ないといふことであらう。

△1026 青山 二面紙 録兩露

他の職業を興へる。(一例は信濃の大新書の編  
 纂の如し)それが文士保潔の志であると思ふ。夜  
 會招待の如きは信中の俗だと反對した。  
 秋高は、人の志業を〜して冷米飯を食うた  
 者が、い〜して大作が〜する。そんな事ある  
 保潔といふと何んぞ成るかと馬倒し。日本は  
 アカデミイを創立せよと結んでゐる。

## 文士と海水浴

明治三十三年の夏の下

石平海 第三十二號、文士と海水浴の漫畫



お出された。当時の文士の消息を~~傳~~傳へたもので、左は指げ。

(説明) 西外、直道二氏は全く文海を出で、弦齋、小波二氏は足を洗せんとする傾向あり。紅葉露伴、眉山三氏は中休みの形(嶋)上陸(を)する(いつまを休んで居る)の一寸分が。練雨氏は妙の洞窟の中に入ると、すゝを居り。美々山嶽の念思案の三氏は海客の沈んだ様子。望村草堂二氏は飄筆の筆致を説明して、

八五三 卷七 二葉地獄伝

# 白下

これは乙だと泳いで居り、柳浪鏡花風葉、魯庵水蔭、青軒宙外、花袋松魚、春葉、赤水、鏡氏は中之遊者、泳ぎを更なぐらひぬが。乙羽氏は海外へ泳ぎ出して来た様子が。浪六氏は文海をいふ出たあんなの如く出たやうな、知る由なし。

自分は、神戸時代の東京可懐(まご)の感情を取入れた。唐櫃山(たからづま)を脱移した(文藝俱樂部七月號)それより、脚本、小説、各地を歩きあつて、~~博士~~博士の単行本を出す事になった。



月

(恋)が当つたが、一字名の目と〜を有  
つたが、大方は失敗(した)つた)

小波(の)獨逸行はいよいよ確定した。父(の)が  
彼の事とて連日(の)如く送別會(が)開かれ  
てゐるが、

自分は福好塾(と)硯友社(と)博文館  
と、三重(の)縁故が結ばれてゐるが、それ  
〜を三張(の)額(を)さしこんだ。

九月二十二日は、インバルヒ號といふので彼  
は積荷を出帆したが、その日(を)本船(を)送  
見送つた昵懇者(は)未だ(完全)な榎橋(が)無か

築港(の)前(を)

つた)船(を)備後丸(に)寄せる。その事務長(は)  
細川風谷(の)名(を)有つた。

九月二十二日午前九時、備後丸(に)在りて君  
の道(の)音樂(を)聞く者、加藤(晴比古)

桂舟、大橋新、同乙羽、年峰、思素、水  
蔭、風谷、紅葉

と紅葉(の)直筆(で)認め、紙片(を)風谷(に)託し  
て有つた。風谷(は)之(を)香港(で)小波(に)渡し  
て有つた。

乙羽(は)此時、帰朝(の)間(を)送(り)つたので有つた。



『六十年間の回想』

明治三十三年の秋

福のそ

自分は小波の留守中を少年時代のものを筆

を兼ねることに事をつづけた。けれども編輯は

主として武田常雄が一人で引当りてゐた。

乙羽は洋行帰りの新智識を以て、目が

まゝに活躍を、編輯と出版とは試みちうりな

成りぬる場を有つた。

乙羽は自分を動かして

の原稿

出原谷君が今まで、あまりの乾葉を引受けて

ゐる。何山人、何山とのふ名前の雑誌の

上の巻(巻)がある。これに就て一部の非難がある。

八二〇 青山 一 阿部清太郎

# 自

のたのしみ、君もどくが際、乾葉を餘り入れ

たいせうとて号に給へ。山に代る水が出

たので、...り同く結果の成るが、

その為、自分は人々を著し、立場を成

つた。それで湖山、茶山などの原稿は、大分拒

絶した。湖山は奮慨して、館長の処へ長文の檄

公開状を提出し、

処、~~江見~~は小波系には辛くもなかつた。

自分の乾葉の原稿は、~~...~~挿用

と云ふので、同ドク非難は高まり出した。



白

筆者は社中交代りし人に見えん。

そのうち成る事、神戸清りの<sup>当座</sup>と違つて、

~~大分急げ~~ 出して、~~みん~~の、乙羽と行前けどの

好意は持つて居るべく成つた。<sup>(矢張り二重性格の出来)</sup> 編輯者の著述家との違ひ分け、一方は寄つて結果よく、一方は赤門系の人を盛んに入れた。其当

時の博士號は今の博士號以上の貴さかつたの<sup>文学士とては</sup>で、大野桂月、中内蝶二、法學士とては桐生

悠々、森山吐虹、そのほか、國府平東とどの前後して入館<sup>ま</sup>至つた。

~~中内蝶二~~

この時分は、<sup>徳永</sup>萬朝報の、<sup>徳永</sup>で、<sup>徳永</sup>当今の新聞記者の、<sup>徳永</sup>と、<sup>徳永</sup>柳洲筆の肖像入りで、毎號評、<sup>徳永</sup>論、<sup>徳永</sup>中、<sup>徳永</sup>左、<sup>徳永</sup>右、<sup>徳永</sup>と、<sup>徳永</sup>自分引張り出さぬ。

(前書)彼は小説家とて知らる。彼れ

自身亦恐らくは記者たる志望を有るべし、

然れども天成記者たるは高ずる。法學性あり、

(中略)著し度量、金力兼具する者、十分

の徳を信じ、彼を信服せしめて、以て新聞事業の、<sup>(下略)</sup> 一面は詩的天才を有し、一面は通俗的世才を有し、<sup>(下略)</sup> 社會の缺陷、人情の弱点を知らざる能く、彼を以て



270

緑雨のロマンス

これは松井柏軒がイタヅラを書いたと見えん。然るにその内容を平洋では失却したから、滑稽で、自分としては悲劇せざるを得ないものがある。

少年世界の探検

明治三十三年の秋から冬

少年世界は、三ふまがらよく小島のお伽噺で持つてくるもので、その洋行中は彼の地から巻頭の小説が通信を送つて来るものであるが、その内容を預ける以上は、自分として何等かの新機軸は出さざるを得ないものがある。それで、冒険小説又は探検実記を以て少年の勇氣を涵養する計畫を立て、最初の試みの

A 10 20 海軍省印刷局

白

疼痛を感じてゐる。

とて、玉川の上流、日原の鐘乳洞を探検する事を断議して、館長の許可を得た。隊員は自分より八人で、通訳部員として山中洞、弓矢部員として齋藤宗白、その他は寺崎留吉、竹貫佳水、磯澤水、大澤天仙、増田乳蔵と、それから十月十日に出立して十三日、東京へ帰る。探検中の一、六尺の深さ、陸落して、右方臀部を打ち、右分間氣絶した。毎年、其所の月日は、疼痛を感じてゐる。

No.

No.

大



白  
12

前者は或る程度まで、自分の経路と月  
際契約(青木大明との)の顧問を書いたのて有  
 った。後者は中て白河魁洋が田園山領事との  
 悲恋に就て語つた9の2ポイントを得た度  
 々の辭から法を取つた直字用いするつた。  
 世間では林間の高塔の方が評判さるる  
カ流水記のは浮きのつらが、或る雜誌の  
 訪問記、露伴がそのを 評判するの 對  
 して、錦雨の來信一れ。  
(前巻)流水記をほめず、林間の高塔を

十一月の文藝俱樂部

林間の高塔と白河の魁洋が田園山領事の悲恋に就て語つた9の2ポイントを得た度々の辭から法を取つた直字用いするつた。世間では林間の高塔の方の評判さるるカ流水記のは浮きのつらが、或る雜誌の訪問記、露伴がそのを評判するの對して、錦雨の來信一れ。

この記事は十一月から連続を始め、果して之は又響き有つた。先年群馬縣廳の計畫で、縣吏が数十名で、利根川北原探検を行つた。これか、日本探検隊の選勝であつたけれど、雑誌主催の探検隊としては、甚しい教養の高層有つた。

流水記の自傳體の小説。同日の 日本 探検隊の 選勝であつたけれど、雑誌主催の探検隊としては、甚しい教養の高層有つた。

白河の魁洋が田園山領事の悲恋に就て語つた9の2ポイントを得た度々の辭から法を取つた直字用いするつた。

A 10 20 第三二回 文藝俱樂部



向

後年このお茶も聴いれりであらう、  
 緑雨は滞在の最中、あの皮肉言が、何一ツ別は小言を  
 吐かふのうら。そんな繁の先では随分人の刀  
 ラを探すが、大層難い方だと安心して  
 るら外に正月元旦（三十二年）年賀の挨拶に行  
 った。廊下の三ツ指を突いた処が、  
 入ったくれ。と、いふので能く入れり  
 した。お茶と出さる。不行届の粒々  
 廊下は塵一ツ落ちる。ケヤンと個條  
 事は、認め有る。その一は皮肉に

細

No

ほめしは、何事かと小生の申居りぬ。此、  
 露伴君よりこの言ありし。何事か。その  
 所知、取文壇の現状申す。無之信。  
 中の人とは申迷ふ。可く信。今や我々  
 の文壇は、傷け居りぬ。（下略）  
 緑雨の語の物は、例の東屋で、静養した裸体訪  
 問し、事のある小川曉善の家ぶり。然るに  
 一時、小川が志つて、女侍を引取りたる  
 のが、不思議な縁で、我々が能く遊びに行つた  
 牛込吉熊の女中頭のお茶といふりであつた。

A 10 20 静養した 裸体訪

詩

No



白  
八

めて見るとと女将が言った、女中はオツ  
 と息を吐いて、文士の奥さんは成ると斯う  
 して是道に雑誌を出るものだからと、  
 問うので、さうだと、と女将が答へた、  
 それで、特々女中は、録雨の産入行く様  
 子成つたのと、お茶は自分も語つて、  
 の間を繋いで、あんな方の言葉のす  
 べと云つた、  
 録雨が小田原に轉地したのは其後ふり有  
 つた。録雨道と云ふのは居るが、

細

細で拾り出さぬので、元日早々酔い目な  
 ところ、  
 無し、一問位有つた、  
 録雨は後、契りを結んだ、その前、  
 が録雨の許は使ひなので、東屋の女将と女中  
 と甘く、  
 海の家を出て、  
 お茶、尾崎さんと江見さんと、  
 江見さんの奥さんはコレで、  
 録雨は後、契りを結んだ、その前、  
 が録雨の許は使ひなので、東屋の女将と女中  
 と甘く、  
 海の家を出て、  
 お茶、尾崎さんと江見さんと、  
 江見さんの奥さんはコレで、

八田 青江 二五郎 録雨の家

No.



# 白

ミドリシン。ミチと読みまはるゝが氣は成ると思へ  
 えて、手紙の住所書きは、ゆづり ~~ミドリシン~~  
 (ミドリシン。ダウ) と胸をルビを振るゝを意  
 るふかつん。

『右平澤』は日乙羽が主裁して 週刊新聞 の  
 週間雑誌に変わる事。成り 桐 田山花袋 の二人  
 が主として編輯の任を當り、他の 西村 西村 西村 は前の  
 如く助筆する組織で有る。(西村 西村 は早  
 稲田大学へ通学するなる 西村 一人)  
 自分は、少年世界の専任 成 成 成、それ

△1118 第四二回雑誌記事

『右平澤』の『右平澤』は『右平澤』  
 雑誌の『右平澤』は『右平澤』  
 雑誌の『右平澤』は『右平澤』

~~反批評家批判~~

明治三十四年の春

明治三十四年の新年小説は、いづれも扱は  
 ぶかつん。それは大町桂月が『放言録』(右  
 平澤第五號)に左の如く云つてゐる。

○新年の小説はひとつ傑作はふかつん。  
 眉山の真弓楓子、雨後其下の紫眼が尤も劣作



# 白 6

自令は、北清事件を就ての軍事紀實小説を  
 集めて、<sup>日</sup>実貫山の名で、博文館から単行本と  
 て出した。併し、<sup>日</sup>あゝとて、<sup>日</sup>水雷戦の如き  
 文壇はふかつた。  
 新年は自分の宅へ集まらん、江水社員（花袋、  
 天仙、萍水、佳水等）小櫻織山、再興の議が  
 出た。ちんで不取敢非意。とて、折込八頁  
 三隊組のしつとる部がけ秀英舎で印刷した。  
 こゝは二號まで出したが、後には妻品とて  
 總六號台字三隊組で四月三日は始めて巻頭を

矢 新

No. \_\_\_\_\_

である。柳原の<sup>日</sup>檀紅茶（紅茶の語か。）  
 日 駱作である。繪巻の破れ垣と つまら  
 ちい小説が、天外の霜夜と、へんぶ小説  
 心。柳原の二人づれ、縁不縁、松の下露  
 は、少しは見所がある。それと他の駱作  
 日 較<sup>日</sup>上の話で、素より傑作ではない。  
 露伴の二日物語、丸二年で完結した。小  
 説と云はるよりは、寧ろ抒情的叙事文と  
 ぞも云ふべきもので、佛語をつかしてこ  
 けおどいをするのが、お人の癖で（下巻）

八二〇三 新二 河内 柳原

No. \_\_\_\_\_



# 白 ハク

6  
 で、赤門<sup>学</sup>の所謂素養は足らぬが、青  
 年文士の所謂熱血が欠けてゐるやうな、  
 秋とは秋の信じてゐる素養と熱血とを  
 持つて立つてゐる(中畧)四千餘万人の  
 同胞中々々の五百部を分配するものであ  
 るやうに、五百人が一冊を一部づつ買つた  
 ら他の三千九百九十九万人は手に入  
 れる事が出来ぬやうなやうに、十二銭は高い  
 の珍品として待たせる價である。  
 うん不意味で氣焔を吐いた。つまり、小櫻

矢 新

No. \_\_\_\_\_

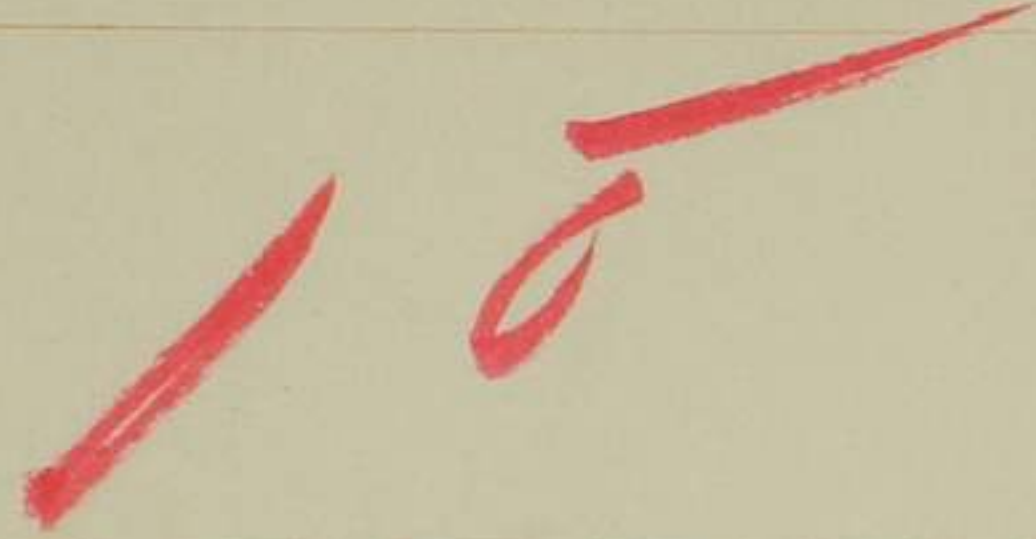
出〜ん。  
 その紙末の社名。  
 (前畧)文藝俱樂部が三百二十頁の藝者  
 の写真までが入つてゐると二十五銭。新小  
 説が二百頁のふあつて二十銭。新聲が大  
 判で八九十頁あつて、紙質は舶来で、挿  
 画が美筆で、その紙が十二銭……なのよ。小  
 櫻紙はとつとつと夕ダの八百の附録が一  
 枚附いて十二銭……高ツツ、無は、高  
 いが(中畧)如何な秋も、ツマラない者

八 10 20 青山 二 四 五 六 七 八 九 十

No. \_\_\_\_\_



# 白



(註) 作家は評家の言を聴くべし、作  
 物の對し辯護し、若しくは批評するは、  
 大なる誤謬あり、強は白色の眼を起え  
 て批評家を批評する。如きは、  
 大なる誤謬あり、強は白色の眼を起え  
 ざるあり  
 と、如き傍若無人の態度を加へて後。  
 此水社の發刊する、小説雑誌は、その目  
 的の絕對を審美とし、且つ能動的に  
 湖の風潮を震動せんとするに在り。され  
 ど其実行の狀態より見ては、曰小

赤門派の文士が、  
 織山は少しばかりの才識を鼻を擧げて、他を  
 凌駕する。と、一と、敗れぬの對し、義憤を發  
 し、又老大家の引込思案を、  
 魚腹に食つて掛る。の輩と、(新) 新文士の  
 庫考を擲る。利肘を加ふる目的で、  
 ので有る。  
 之を對して各方面より反感は起つた。其中で  
 自分の對し關係深き、日下平岸の紙上を、  
 其指七號(四月二十九日)に於て、作家の  
 強能と對し、青龍刀を、匿名で、



1月

自分は彼(の)一行(の)人(々)で、  
 品川から同車してあるのがりた、  
 知らずいっせいに下車して見ると、  
 人ふり、社め、心着いたが、  
 海軍(の)人(々)と、  
 球技(の)場(場)に、  
 東を日本式(の)道成(成)を、  
 併し、  
 就て、  
 不平(平)山(山)第九(九)號

No. \_\_\_\_\_

三上三郎の著る  
 120  
 120  
 『明治三十四年の春の中』

櫻織(はな)は、  
 あり、作者(さ)が、  
 その一側(は)を、  
 理想(りやう)と、  
 の口(くち)を、  
 トロ(とろ)の、  
 ぶ(ぶ)の、  
 川上(かわかみ)三郎(さぶら)の、  
 銀行(ぎんこう)の、  
 筆(ふで)を、  
 偶(たふ)然(ぜん)

山一新聞社蔵

No. \_\_\_\_\_



月  
又

同日船境の事

於て好意を書せしめんと返事を遣はす。  
その二度目の洋行の船中で受取つて、川  
上は同行の藤川岩之助を頼む。廣い世界は  
私に書かす同好を書せておける者は、吉永  
貞通とい人が有りか。と云つて泣いたといふ  
ことが後年、オセロに於て文士と俳僧との  
接点を見れば機軸と成つたの事有つた。  
四月に入つて春陽堂から江の島道山を單  
行本として出版した。それは片瀬土産品の  
改題で、これはて羽の詠解を得て、訂正する。

(三月四日発行)の川上と貞奴らと題して  
俳如隠居の匿名で——西洋へ芝居を見せる行  
つた者ぶりの。西洋へ芝居を見に行つたので  
けいといひ、西洋土産は少しも~~無~~洋刺  
の影響の無いのは当然だ——といふ意味で、  
頼まらぬやうに辯論を書いてやつた。  
大阪へ落ちるとある川上より、俳如隠居を去て  
單なる感謝状を書かすかと、自分は初め  
~~て~~江見だといふ事を名乗り、  
君と同様、ちのは今日が始まる。神戸は



白  
21

水戸氏は恐ろしいこの評を甘受せざるは  
 や、朝笑の意を念んでは居るが、現在の  
 家ではあゝ、詩人のあり様ねえと。言、  
 といふ、世人の言へて曰くは「いせ小説  
 の向て、水戸は小説家のあり様ねえと  
 かういふことある。」  
 (文庫) 江戸といふ人の評は、  
 江の崎は奇りな好評で、中央公論  
 社の

ついで、神戸行の前は原稿を手納し、取返  
 してある。これに、  
 陽堂の方は、  
 水戸氏を春陽堂で出版する事案を、  
 け方は取上げ、  
 二月十一日は  
 軽快に向つたが、腸チブスの疑いで、  
 第一醫院に入り、青山博士の診察を受けた  
 てあらば、病原が判明せず、この時は危険



# 角 乙

病的活動以外作家が写すべき餘地は幾  
何もあり。水産の以ては著目して健穩な  
者を作したの故にすべしである。(下巻)  
(星月夜日) 前巻諸家の批評よりして、  
此作が悲哀小説や独斜小説の中、光明  
的、田園的の趣味を發揮してゐる点、  
讀者の同情を惹くといふ事が、此作  
者が人間より自然を書くのびくまとい  
ふの多量の評よりいふ併し此の作が  
小説として不の字であつたといふこと

あつたのである。私は、詩人派といふ江  
水社の旗幟を許さずして水産氏は、大に  
奮勵を要すると思ふ。  
讀者の紙上で當時世間から注意されたい月  
曜文壇の合評會(山水子、白鳥子、秋  
江、星月夜等)より五月二十六日紙上  
の備足、諸君一書せよ、同情など、都門の  
男(白鳥子日) お白粉臭い小説は厭きてる  
ん頃、あつたりし此作を接して一寸境  
しのつた。平和の境の大波瀾と小天地間  
の備足、諸君一書せよ、同情など、都門の



寺文館の短評集の月と梅とを出版した。

# 月と梅

然るに有つたか、陽明常山は江見家とは違つて親戚関係で、常山の孫に當るといふ老人を自分は子供の時を知つてゐた。非常な教養家で、大小世他の持物より人目を驚かす物が有つた。併し愛着が痛死したのを、花博の振子、女屍を抱いて一夜を明かした。この変態的逸話を遺すものがある。

高山樗牛の神戸とその他の地方新聞の戦々々小説を、概ね各単行本として出版する事になり、ついでその時、こんど軽俊を公けりて後

之におのづから諸評家の一致する所と見えん。全篇を通じて、一道の稚氣が漲つてゐる。それを却つて面白いと見る評家は、寺文館の短評集、何うであらうか。(下巻) 博文館の短評集、神戸を引拂つた、其義務を果したるは、帝國文庫の校訂をせよ。(但し大澤云仙が殆ど女仕事を片付けられたので有つた) 續高僧傳の如きは、佛敎入門外漢の自分代つて、佛門出の云仙が全部を引渡りてくれぬので有つた。 常山紀談の

A 10 20 書山 三短評集



# 白 24

藝文部 四月號で発表した。

右平澤 第十四號（四月八日発行）の

文壇漫言は 莫耶をい。

（新巻）水蔭と一言一致の文体を巧み  
 操つた点、その長所は雅体と在るもの  
 一如し。本誌の如き其調いと暢い、  
 評議の際三の論議ふし（下巻）

と評した。  
~~同第十九號の大町桂  
 月の文壇漫言の如きもの、きり、今テの~~

世に恥を晒すよりは思ひあゝと思つた。有  
 つたが、却て二十六年を越えて今日も成  
 こそ見ると、そんな物は何れも責つてある  
 いのちあらず、之は必ず後世に傳へるもの  
 を信じて、あつた。疾くは世に傳へるもの  
 千古不朽の作の御難きは知るべし。

## 文壇照魔鏡の事件

明治三十四年の春の下

流水記の 後巻として 落花生録の 文



# 白 25

阿彌陀佛と唱へてゐる。誠々たる心と業  
 せざるを得ず。文壇の中心は、  
 事件であつた。それは題名の如き単行本で、  
 猛烈な與謝野鉄幹(寛)の攻撃をうけたもので、  
 それが又奇怪な事あり、著者の発行所は、  
 印刷所も、すべて不明ふり、前年の文学  
 者である法山、同ド姓式で出版されて、現在社  
 長の諸方家を嘲罵した(それは内田魯庵の  
 悪戯であつた)それは偽しき罪が軽かつた

文人としての後世の文学史を飾りつゝ人々  
 と陳言してゐる。  
 小説家としては露伴、紅葉、  
 評論家としては道徳、西村、  
 韻文家としては藤村、晚翠、  
 俳人としては子規、  
 歌人としては信細、鉄幹、  
 その餘の脛々たる多士その身ぶりをそ  
 の書院の世に志する。一生筆を磨くその得  
 る所は徒ら紙魚の腹をこやし、  
 無







旬  
27

篤といふを、兎野といふより、詩詞の意味  
で、病室に入ると許される様子が成つた。  
自分の見舞つた時、執事をしてこつてゐる。  
魂を社の中へ、後手は、  
強き自分にて其の世話を成つ  
其友情を對して、謝恩の擧げの魚のついでに、  
胸が一杯に成つた。有つた。  
六月一日、乙羽家へ起る。三日、戸崎町の  
野（今の博文館）編輯局の一連筆は大郎  
（分る）（通夜）（自分は臨み）  
杜嶋の鳴き、鳴き、明のせ今宵

No. \_\_\_\_\_

12  
乙羽の死  
昭和十一年の春

何嘗か其所の意味有り氣味見ゆ。（附言）  
梅子は無罪ぶりき）  
五月下旬、山の下町の陣屋横町に移居した。  
家は大きき土蔵の裏で、敷地は八間、庭  
園も廣く、その隣地が更なる廣く、この  
併せて使用した。  
乙羽は腸チブス、肋膜炎と成り、  
病状が甚だ特異で、眞の病原は青山  
博士と猶且つ不明なといふのであつた。  
それによつて會々謝絶で有つたが、  
その

11020 青山 二河原宮氏藏

No. \_\_\_\_\_



編輯局の者その他も皆哀悼の至情を伴ひ、  
誌を成した。

四日、<sup>の葬儀</sup> 會葬者室を一千有餘。葬儀院

乙羽魁文居士とて、谷中の養福寺に埋葬  
されし。

會葬者の中より、二條、岩倉、二公、山縣、二

侯。田中、厚史、小笠原、藩子爵の代理。牧野

子爵、石黒、野村、肝付、海軍少将、橋本、雅邦、

川端、玉堂、其他、文藝者、藝術家、知名之士は

殆ど全部で有つた。

# 白

親友寺崎 <sup>廣</sup> 世業の60きは

苦学時代、宿所の常盤津林中の二階と二人

で借りしるを、自炊をつくり、一枚の羽織を

交代り着て外出し、いそいそ程の間で有つた

一杯飯を眼を湛へてゐた。

曰 乙羽は馬鹿だ。自分の命をたげすぎで

勉強した。と之つてゐた。その馬鹿がとて

る中、千高無量の思ひが含まれているのは

勿論で有つた。 <sup>文学、美術、出版の他は、</sup>

乙羽は字、真、界、あり、大い、は、書、し、た、り、で、

且つ、本邦最初のグラフ創刊者で有つた。



の方の逸話とては、<sup>女壇大徳の觀有る</sup>伊藤山陰の西元老を、<sup>又申龍</sup>同  
<sup>新聞雑誌の</sup>レニズの中は牧師の事や、<sup>又申龍</sup>六階二倍きり  
 並べて描つたり。へ今日何いふ<sup>又申龍</sup>班が活躍  
 せぬ時代で、至難<sup>と</sup>されてゐるので有つた。女壇  
 元老大官達は愛せられてゐる。  
 それを併へて<sup>のツ</sup>ホコリとしちつと一  
 れつりふく、斯くして文藝と元老とを親密  
 ありめやうと討つたのは他ぢやぬ。  
 病める樗牛が、右平<sup>の</sup>で、こ羽凡を思  
 ふと題して。

八 10 20 東 四 二 區 地 區 報

No.

2月

(夢) 君と妻れと、憶へばけのふき大  
 ありけりよ。君がけりしと聞きたり、  
 吾れは君が事をうらあしむ喜ぶべし、  
 哀しいか吾れが心しれと誓をば結ば難  
 し。女、吾れ長へはすれ君を見るべし  
 るべき<sup>半</sup>。(下巻)  
 桂月も同誌のこ羽を思ふと題して  
 (夢) 何人か外はなほ昔しき心  
 君の如く、何人か昔しき心  
 類少ふおるべし。君と一こ<sup>謝</sup>あつた。

細



# 白

君を愛して措かず。君は何人とも愛せら

る。君と人となり、快活、無邪氣天眞爛

漫して、憂<sup>い</sup>々<sup>や</sup>ふりなせ也。(下巻)

(今は樗牛、桂月、赤七、人あり。書いて爰

に至り、<sup>驚</sup>慨然<sup>と</sup>ざるを得ぬ)

紅梅は既に胃を病み、神経衰弱に罹つて

夢山の<sup>口</sup>金色夜叉の如く書きすまはる

べ、<sup>口</sup>それぞ日暮儀の如く、悼<sup>れ</sup>ずは来て、白

分<sup>り</sup>の向<sup>ひ</sup>に、<sup>口</sup>硯友社から送花一巻を贈るは

就て、打合せをせしむ、懐中の<sup>口</sup>社<sup>中</sup>名<sup>の</sup>紙片

をばして、<sup>口</sup>この<sup>口</sup>を<sup>口</sup>閉<sup>り</sup>てくれ。あど<sup>口</sup>泣<sup>き</sup>しん。(本札

はあ<sup>口</sup>今<sup>口</sup>の<sup>口</sup>如<sup>く</sup>用<sup>ら</sup>る<sup>口</sup>ん<sup>口</sup>あ<sup>口</sup>い<sup>口</sup>ん)

旅行家懇親會

明治三十年の夏



ノ 10 20 集 27 一 遊歴集 1 巻



月

家、指、一、白、江、川、鯉、馬、藤、引、網、  
を、試、み、事、成、つ、た。 上野、野、郎、の、 新、撰、の、 六、月、八、日、

小林天鏡 墨場新水

久保天隨 寺崎廣業

坪谷水哉 田山花鏡

中内蝶二 大町桂月

国府犀東 三浦北峽

以上、自分の十一人で有つた。以上が、さう  
時では文藝家中の旅行家たるを有つた。

八 10 20 年 二 四 五 六 七 八 九

酒 汀の家、一、白、皆、酔、つ、た。就中、廣業、酔

態、甚、だ、一、く、無、地、の、神、板、墨、繪、の、老、松

を、揮、毫、す、る、時、墨、滴、長、く、垂、れ、り、を、直

ち、の、書、の、姿、も、せ、ら、ふ、の、曲、藝、の、姿、も、

で、大、唱、末、で、あ、つ、た。

水、我、は、得、意、の、字、真、接、と、持、返、つ、た。

鯉、自、の、馬、藤、引、網、は、鯉、の、池、に、鱸、と、雨、の、

併、し、酒、豪、揃、ひ、の、事、と、て、要、意、の、酒、樽、を、空、に

し、た、の、が、あ、が、吞、み、あ、り、め、と、不、良、組、天、鏡、

水、天、隨、桂、月、廣、業、蝶、二、な、が、自、分、の、七、人、は、



有る  
江戸台を傳で  
~~種~~断  
走  
船橋を  
踏んで

(ついで)

八  
二〇  
書  
二  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

No.



